

# 西洋人による日本人認識の起点を何処に求めるか ～戦国時代末の宣教師の文献を通じて～

金 美廷 (韓国外国語大学校日本学科博士課程 3 学期在学)

## はじめに

1543年8月25日、日本の種子島に3名のポルトガル人が中国の船舶で上陸した<sup>1)</sup>。彼らは日本の歴史においてはじめて日本を訪問した西洋人だと記録されている。上陸以降、ポルトガルの町人と宣教師によって日本は西洋、すなわちヨーロッパとの交渉を開始し、ヨーロッパから多くの文物を取り入れ始めた。同時に日本も西洋に本格的に知られるようになった。その以前にも、日本はマルコ・ポーロの『東方見聞録』<sup>2)</sup>によって、「黄金の島」(ジパング)としてヨーロッパに知られていた。

しかし、直接的な交渉と情報交換は1543年の後からであり、当初において、この任務を担当した階層がイエズス(Societas Jesu)会の宣教師たちであった。言い換えれば、彼らを通じて日本は西洋の文物を取り入れる一方、彼らの布教報告書と文献によって日本の多様な面貌がヨーロッパに知られ始まったと言える。そして彼らの記録と文献に示された日本・日本人観は、その真偽のほどは判らないが、西洋人の日本認識の起点とも言えるだけでなく、その後の西洋人の日本観の形成に影響を与えた<sup>3)</sup>。

当時、日本人に対する評価である「礼儀正しい、妻は夫に順従的だ、集団に順応的だ」などが、現代の日本人の特性としてよく挙げられている典型事例である<sup>4)</sup>。本小論では、戦国時代の末期、宣教師の文献を通じ、先ず西洋人の日本人に関するステレオタイプの由来を検討する。因みに、現代の日本人に対するステレオタイプとは正反対の記述が存在することに触れていきたい。そこでは、西洋の対極的な他者としての東洋認識である“Orientalism”を念頭に据え、中世西洋人の日本認識にも簡単に言及してみたいと思う<sup>5)</sup>。

## 1. 日本人の気性の原点を見る

日本人の性格や気性に関して宣教師の中、最初に印象を受けた人はフランシスコ・ザビエル(Francisco de Xavier, 1506-1552)であった。彼は周知のように日本を訪問した最初のイエズス会の宣教師である。1549年に鹿児島に着いて平戸と山口などを巡りながら布教活動を展開して1551年に日本を去った。始めて日本を訪れた宣教師として彼の日本に対する評価は、次のイエズス会の日本での布教活動に決定的な働きをした。

日本人に対する印象は彼が同僚宣教師とイエズス会の総長に送った書簡に詳しく現れている。鹿児島に着いて何ヵ月後の1549年1月5日付けの書簡でインドの同僚に送ったのを見ると次のように記録されている。<sup>6)</sup>

日本人は、われらがいままでに交わった人々のなかで一番優秀な国民である<sup>7)</sup>。異教徒の間でも、彼らを凌駕するものはほかにないと思う。彼らはきわめて人付き合いがよく、総じて善良な素質をそなえており、悪意のない人たちである。彼らはおどろくばかりに名誉心に富んでおり、何よりも名誉を重んずる。日本人はたいてい貧乏であるが、さりとて、武士たると平民たるとを問わず、なんびとも貧乏を恥辱だと思っていない。非常に貧しいが、平民から、まことの富裕者同然の尊敬をうけていることである。武士はお金に目がくらんで富裕な平民の娘と結婚することは断じてない。日本人は、人との交わりにおいては、きわめて礼儀正しい。

上の書簡の内容をみると、日本人は人付き合いがよく、善良な素質をそなえており、名誉心が高く礼儀正しい。こういう点から日本人は優秀だとザビエルは評価している。このように日本人の気性に対する高い評価は、ほかの宣教師の書簡や文献でも共通的に見られる。特に、コスメ・デ・トルレス (Cosme de Torres, 1510-1570) の1551年9月29日付けで、宣教先の山口からインドの同僚宛の書翰を見るとその表現はさらに際立っている<sup>8)</sup>。

すなわち、「日本人は世界中のどの国民よりも、わたしたちの聖なるキリスト教を植え付けるのに非常に適している。彼らはおおいに分別があり、スペイン人と同様、またそれ以上に理性にもとづいて己を処する。(中略) 彼らの長所をことごとく記そうとすれば、インキと紙が不足するであろう」との内容である。トルレスは日本人の気性を評価するうえで、インキと紙が不足するほど枚挙に暇ないという誇張の表現まで用いて褒めそやしている。

トルレスは「日本人は理性にもとづいて振る舞う」といって相当に合理的な評価している。オルガンティーノ (G.P. Organtino, ?-1609) は、ローマの総長に宣教師派遣を頼む書簡で、「尊師、願わくは彼らを野蛮人と見なし給うことなかれ。信仰のことはともかくとして、われらは彼らより明らかに劣っているのである。私は日本語を理解し始めてより、かくも世界的に聡明で明敏な人々ないと思えるに至った」と述べ、日本人の理解力について高く評価している<sup>9)</sup>。当時ヨーロッパで「野蛮」の対象とされていたアフリカとアジアの人々への評価と異なり、日本を高い水準にある人々と見なしている。そして、この評価の対象は貴族や武士階級だけではなく平民まで含まれている。当時の日本文化の水準がヨーロッパのものに劣ってないことを示している部分である。

しかし、宣教師の間には、以上で紹介したような肯定的な見解だけがあるのではない。例えば、フランシスコ・カブラル (Francisco Cabral, 1530?-1609) は、日本人の明敏さを取り上げ、凄く狡賢いと表現している。

私は日本人ほど傲慢、貪欲、不安定で偽装的な国民を見たことはない。彼らが共同の、そして従順な生活ができるとすれば、それはほかになんらの生活手段がない場合においてのみである。ひとたび生計が成り立つようになると、たちまちに彼らはまるで主人のように振る舞うに至る。日本人のもとでは、誰にも胸中を打ち明けず読み取れぬようにすることは名誉なこと賢明なことと見なされている。彼らは子供の時からそのように奨励され、打ち明けず、偽善的であるように教育されるのである。(中略) 彼らはラテン語の知識もなしに私たちの指示に基づいて異教徒に説教する資格を獲得しているが、これがためにわれらを見下げたことは一度に留まらない。(中略) 日本で修道会に入ってくる者は、通常世間では生計が立たぬ者であり、生計が立つ者が修道士になることは考えられない<sup>10)</sup>。

カブラルの評価は、彼が日本人に対して親近感を抱かず、敵対感を露わにしたものである。彼は日本人がイエズス会に参加することは純粋な宗教的な理由ではなく、むしろ経済的な損得から始まったと指摘している。1970年代日本が高度成長を達していた時期、日本人は世界から「エコノミック・アニマル」という批判されたが、こういう経済的な利益を優先する日本人の原点をカブラルの評価から垣間見るようでもある。

もう一つ目立つのは、「誰にも胸中を打ち明けず読み取れぬようにすることは名誉なこと賢明なことと見なされている。彼らは子供の時からそのように奨励され、打ち明けず、偽善的であるように教育されるのである」の部分である。今日にも日本人の性格を論ずる時、際立っている特徴の中で一つは、「ホンネ」を隠して「タテマエ」で他者と交わろうとする気性である<sup>11)</sup>。

これに関連して、土居健郎によると、ホンネは自己意識の表現で、タテマエはそれが通用する集団内での社会化の産物である、と言う<sup>12)</sup>。日本では個人の意見を積極的に主張することより、集団内の合議のためにホンネを隠すのが美德だとされているのである。こういう日本人の性格がカブラルには偽善的に見え、その点は、今日にも日本人との交際においてしばしば経験することである。

カブラルが指摘した日本人の傲慢は肯定的な評価をした宣教師たちの間でも出てきた。初期には肯定的な評価をしたザビエルも2年余りの後に送った書簡には、その変化が見える。すなわち、「彼ら同士の間ではおおいなる礼儀をもって交際がなされているが、外国人を軽視しているので、外国人に対しては礼儀をつくさない<sup>13)</sup>」との内容である。ザビエル以外にも宣教師たちは、外国人に対する日本人の傲慢を指摘した。しかし、彼らが日本人を傲慢だと受け取ったのは、外国人に対する日本人の反応についての理解不足に起因すると判断される。

丸山真男は、政治思想史の見地から日本社会と文化を「ササラ」型と「タコツボ」型に分ける<sup>14)</sup>。ササラ型は西洋文化のようにグリース時代以来、文化的伝統が底に敷いてあり、その末端が細分化されているのに対し、日本では文化が一つ一つの枠の中に入っていてタコツボ型になっている、とするものである。この一つ一つのタコツボの集団は閉鎖的になりやすい。構成員は各々集団にしっかり囲まれて、組織のウチとソトが確実に分かれる。構成員はソトに対しては閉鎖的な傾向を表し、ウチでは一致団結して共同の目標を達成していく。日本人にとって宣教師たちは明らかなソトの存在であり、それゆえに拒否感を表しはしたが、これが宣教師にとって「軽視」あるいは「傲慢」などと受け取ることになったのではないかと思われる。

宣教師たちの見解を通じて見た日本人の気性に関して、現代の日本人の特徴とも言われる礼儀正しさ、ホンネとタテマエ、集団的な性向が、この時期の日本人からも読み取れる。しかし、全般的に宣教師が高く評価していた「理性に基づいた合理性」は、今日の評価ではみられない事項である。芳賀綏は今日の日本人の精神世界の特徴は直感的で、非分析的だと指摘した<sup>15)</sup>。中山正和によると、日本人の勤は、匠人が弟子に芸を教える方法で、芸の周辺を教える。そうすると、弟子の脳には周辺に記憶が蓄積されて、情報の量が多くなりながら、直感力が発揮されるようになるという<sup>16)</sup>。このように非論理・非分析の強調が現代の日本人の特徴であり、「理性に基づいた合理性」という評価は独特な現象である。この指摘に従うと、現在にある種常識化している「西洋近代社会は理性的で、合理的な一方、日本社会は直感的で、感情的」というステレオタイプは、中世の西洋宣教師の日本人に対するイメージと相反することになる。

## 2. 日本人の衣食住から窺えるもの

日本人の外見については共通的に皮膚が白いと書いてある。宣教師が渡日したルートを見ると、ヨーロッパからアフリカのモザンビークを経由してインドとマラッカ、中国のマカオを過ぎて日本に入る海の道である<sup>17)</sup>。そのルートから分かるようにこの地域の人々は皮膚が黒い。それ故に、相対的に日本人は白いと感じられる可能性がある。しかし、ビレラ(G.Vilela, 1525-1572)は、その白い程度をポルトガル人に劣らないほどだと言った<sup>18)</sup>。

服装に関して見ると、日本人は衣服を気にしているのが判る。ザビエルの書簡<sup>19)</sup>を見ると、「彼らはその全財産を、衣服と武器とおのが家来のために用いて、貯蓄しない。」また、ビレラの書簡にも次のような内容がある。<sup>20)</sup>

国民はほとんどみな、絹衣をまとい、冬には同様、絹の屑を入れた暖かい衣を着用する。夏には長い僧衣に似た薄い肌着をまとい、はなはだ良好な絹の帯を結び、手には金箔を塗った扇を携える。

ここで見ると、日本人の服飾において主になる生地は絹で、ヨーロッパ人に絹は相対的に高価のもので、日本人の衣服は派手で、かつ衣服にたくさんのお金を使っていると判断するきっかけになったと思う。

ルイス・フロイス(Luis Frois, 1532-1597)は『日本覺書』<sup>21)</sup>の第一章と第二章で日本人の外見と服装について男女区別して詳しく説明をしているが、いくつかの例を抜き出してみる。<sup>22)</sup>

1. われわれの衣服はほとんど一年の四季を通じて同じである。日本人は一年に三回かえる。夏帷子、秋秋袴、冬着物。2. われわれの間では彩色した衣服を着ることは軽率で笑うべきこととされるであろう。日本人の間では坊主と剃髪した老人以外は一般に、すべて彩色した衣服を着けている。30. われわれは喪に黒色を用いる。日本人は白色を用いる。43. ヨーロッパでは男が扇を携え、それで煽いでなら、それは柔弱なこととされよう。日本ではいつもそれを帯にさして携え、使用しないものは、下等で、賤しいものである。

2. ヨーロッパで女性は金色の頭髪をしていることは誇りであり、そのために色々のことをする。日本人はそれを嫌がり、髪を黒くするためにできる限りの努力をする。12. ヨーロッパの女性は額を白くするために化粧品を塗る。日本の高貴の女性は正装をする時、額に黒い塗料をいくらかぬる。

フロイスは日本人の衣服について描写と記述だけをしている。ヨーロッパ人のそれと比較して反対のものと自分の目に慣れてないものに注意してこれを記録した。すなわち、自分たちがしない振る舞いや小品、たとえば、扇や生地の彩色など、こういう点から日本人は衣服を気にしていると判断を下したと思われる。反対に、宣教師たちは見窄らしい服装のせいで見下されたり<sup>23)</sup>。日本人は相当に見掛けに気を使っているのは、相手に映される自分について心配するからである。日本人が有する恥には、自律的な恥と他律的な恥がある。自律的な恥は自分の基準に照らして恥ずかしいと思うことで、他律的な恥は他人の基準を想像して恥ずかしいと思うことである。見掛けに気を使っているというのは、他律的な恥が発現されたからである。見掛けに重点を置く日本人が宣教師には贅沢だと思われたのである<sup>24)</sup>。

ここで目立つのは色の観念で、ヨーロッパでは白色が生を意味し、黒色は死を意味する。これと反対

に、日本では黒色が生を意味し、白色が死を意味する。日本人の色感覚について巡察師のヴァリニャーノ(Alessandro Valignano, 1539-1606)も言及している。すなわち、「我らが明るく陽気と思う白色を、彼らは喪と悲しみを表すものと考え、我らが喪中身につける黒色と紫色を彼らは喜ぶ」<sup>25)</sup>と。また、女性が化粧をする時にも、黒くすることから、日本では黒色の意味が特別に感じられているようで、新しい興味を呼び起こしている。

日本人の飲食については菜食が主になるメニューだと明らかにしている。ザビエルの総長あての書簡を見ると「食生活についていえば、彼らの生活は悲惨をきわめている。麦もあり野菜もあり、その他あまり栄養価のない食物があるが、彼らは米しかたべない。彼らは、米から酒をつくる。それ以外には酒はない。」と記録されている。

肉類と魚類に関する言及はまったくなく、米が主になっているのを明らかにしている。ピレラの書簡はもっと具体的である。例えば、「戦争が絶えないから、土地はあまりものを生しないが、元来、はなはだ豊沃で、国民はわずか耕すだけで多量の米、すなわち当国の主要食糧を収穫する。また、麦・大麦・空豆、そのほか数種の豆類野菜としては蕪大根茄子および果物としては梨・石榴・栗などがあるが、非常に少ない。肉はとても少なく、全国民は肉より魚類を好み、その量は多いし、はなはだ美味で良好である」と言った具合である。ピレラによると、日本人の主食は米と魚である。しかし、フロイスのよると、日本の女性は魚類も摂取しない場合が多かったと言う<sup>26)</sup>。

肉類を摂取しない日本人の飲食を「悲惨をきわめている」という表現から判断すると、日本人のメニューはヨーロッパ人と比べて立ち後れていると位置づけられてしまったようである。しかし、日本人の食生活は自然的条件と宗教的な背景によって必然的な結果で、今日にもその影響は残っている<sup>27)</sup>。

当時日本を訪問した宣教師たちにはこれに対する理解が不足して、「悲惨」だけに見えたのである。日本人の食習慣のために宣教師は布教において大変な苦勞をした。肉食をした彼らは日本という新しい国で布教のために日本人と同じ生活を営為することで親近感を示そうとしたが、食生活においては限界を感じた様子が窺える<sup>28)</sup>。日本の飲食は宣教師に大きい問題で、異質的なものであった。これは宣教師たちが、どれほど遠い東洋に来ているかを切実に感じさせたのに違いない。

次に、住居に関してピレラの書簡をも見ておこう。

この国は海に囲まれ、しばしば大地震がある。そのために当国の家屋は石でつくらず、木材で非常に良好な家屋を建てる。そのような家屋は地震があっても倒壊しないが、さらに別の大きい危険がある。すなわち、火災のために多くの家屋が財産とともに焼失して、住民は貧窮におちいる。金持ちや貴族は、邸内に土でつくった非常に堅固な建物を有し、そこに財産を収納する。しかし火がそこに入るならば、すべて焼けて、彼らは資産を失ってしまう。金持ちや貴族は邸内についていくつかの離れた部屋を有している。それは来客にそなえるためであるが、来客は頻繁である。部屋はみな非常にせいけつでととのっており、いかなる国の王侯でも躊躇することなくそこに入ることができるであろう。

ピレラは日本では自然的な条件で木材家屋が発達したのを指摘しながら、脆弱点まで言っている。そして日本の部屋はとても清潔だと言っているが、室内で履物を履いて生活するヨーロッパ人とととのっている日本の部屋は清潔に見えたのは当然のことである。

### 3. 奇異に映った日本人の宗教観

宣教師が日本の布教活動においてかなり気にした階層は僧侶であった。宣教師の立場からは、布教という利害関係があって、僧侶は警戒の対象なので、彼らに対する評価はよくない。ザビエルの僧侶に関する評価をみよう。

ヨーロッパの司祭に当たる僧侶と比べると、一般の住民のほうがずいぶんと罪を犯すことが少なく、またより理性的な生活をしているのを知った。僧侶は、自然の理性にそむく大罪を犯すことに慣れ、それを公然と口に出していい、けっしてわるいこととして否定はしない<sup>29)</sup>。

日本に来るわたしたちの同僚は、過酷な迫害を回避しえないであろう。なぜなら、当地の宗門とことごとく戦いを交えなければならないからである。また、僧侶たちが、いかに巧妙な手口でもって、一般庶民からたいせつな財宝を巻き上げているかを正々堂々と世間に陳述しなければならないからである。しかし、彼らは自分達の悪行を世間に暴露されて黙ってはいないだろう<sup>30)</sup>。

以上のようにザビエルは僧侶に関して、一般の住民に劣っていると評価した。当時の仏教界は世俗化されて財力家と結託して、墮落した様子を表している部分もあるが、イエズス会の立場から異教徒に酷評を加えて誇張した部分もあろうと思う。

もう一つ面白いのは、日本の僧侶はイエズス会をよく訪ね、宣教師たちに厄介だと思わせたようだ。トルレスの書簡を見ると、「メストレ・フランシスコ(ザビエル)師がこの町に(山口)に来た日からいままで五ヶ月ほどの間、朝から夜の大部分にいたるまで、あらゆる種類の難問を持ち出そうとし、仏僧、もしくは俗人たちが来なかった日は一日としてなかった」と記されている。僧侶たちは答えにくい質問で宣教師たちを困らせたと言う。僧侶たちのこういう行動は他宗教に対する警戒というよりは、織田信長のような日本人の好奇心に判断される<sup>31)</sup>。

鶴見和子は日本人が外来宗教、イデオロギ、制度などに接した時、食欲の好奇心であらゆるものを取り入れ、それが伝統の上に積み重なって来たという。日本人は自分の集団の外で発生した事物に対する好奇心が強くて、外国旅行と外国語の習得に対する欲求が強い。こういう気性が生まれるのは、シャーマニズムの非排他的な宗教的態度がフィルター役をしたのであるという<sup>32)</sup>。しかし、外来文物や思想の受容において旺盛な好奇心を表しているが、外部人には閉鎖性を表して、解放性と閉鎖性が混在している中層構造を見せる。

僧侶たちと関連して宣教師が悪行と指摘するのは色慾である。一般の人々に蔓延している色慾に僧侶は宗教修行者として制止させるべきにも拘わらず、悪行にもしなく、むしろ僧侶がこういう風俗を持っていた<sup>33)</sup>。これは同じ宗教人として宣教師たちが僧侶を酷評する言い訳になり、日本の僧侶を野蛮に見て嫌悪する原因になった。

日本人の宗教観についてザビエルは「国民の多くは太陽を礼拝する。また、月を礼拝する人々もある」<sup>34)</sup>と記し、日本人の万物崇拝について書いている。日本の宗教は土着宗教の神道と神道化された仏教で、神道はすべての万物に精霊が入っているというアニミズムに基盤を置いている<sup>35)</sup>。唯一神のデウス(Deus)を心棒する宣教師たちにこういう伝統的な日本の宗教観は越えにくい課題であったと推測される。

フロイスは現在にも言われる日本人の宗教的特色である「生きているうちには神様、死んでからは仏

様」を正確に把握していた<sup>36)</sup>。すなわち、日本人は生きていくうちに行う多くの儀式の中で大部分は神道式に行われるが、葬礼だけは仏教式で行っている<sup>37)</sup>。日本人の宗教観はイエズス会の宣教師には布教地域でよく経験する異教徒の一種で、布教課題にされた。仏教を非合理的で墮落したものと思い、そのなかにいる日本人も教化の対象にした。それも日本人の無知から発したのではなく、誤った宗教のためだと捉えていた。

#### 4. 厳格な規律と残虐性のあいだ

日本人の気性に触れた箇所でも取り上げたが、宣教師は日本人の礼儀正しさを指摘した。この礼儀正しさは、武士の間での規律と主従関係から記録していると思われる。主従関係では儀正だけ見られるのではなく、厳格な規律もみえる。トルレスは書簡<sup>38)</sup>で、「彼らの国家統治はきわめて厳格で、そのために国内は最上に平和である。修士も学士も弁護士も公証人も、さらに裁判官もいない、そして訴訟争いをおこすこともなく、おおいに驚嘆に値する」と記し、国家統治が厳しく行われていると言った。因みに、「この国の領主たちは、その家臣や家僕たちからおおいに熱心に奉仕され、敬われており、どのような身分の人でも、その家臣がすこしでも命令に従わないと認めるときには彼を殺させてしまう。それうえ、家臣たちはみずからの主君にはなはだ恭順で、主君が彼らに話をするときには、つねに頭を下げ、極寒のおりでも地面に手をついたままにいる」と記している。

イエズス会の宣教師が訪問した時期は、戦国時代で、日本歴史においていつよりも乱れていた時であった。当時、日本社会の特色は下克上で、戦乱が全国に拡大したとともに実力だけで生き残る時代であった。この時期に、武士たちは自分の体制を守るために、それぞれの「分國法」<sup>39)</sup>を作成していたが、それは極めて厳しい規則であった<sup>40)</sup>。国家の統治体制が厳格だというよりは、武力と実力による厳格な規則が先んじた時期である。それゆえ、この時期の宣教師に日本は節度があるように見え、主従関係の厳密な区分を特徴に見ている。

中根千枝が指摘したように、上下関係での位階秩序は今日の日本組織社会にもそのまま残っている。タテ社会と言える日本の組織社会は、人間関係において徹底な序列意識に基づいて創出された社会であった<sup>41)</sup>。しかし、土居によれば、この序列は権力関係ではなく、儀礼的な序列で下が上に従属させられるのでもないとした。要するに、上下が調和することで、互いに礼儀を失わないことだという<sup>42)</sup>。

戦乱の時代に他の特徴は武器に対する態度に表出された。これを観察した宣教師たちは漏れなくこれを記録している。トルレスのように戦時状況を看破できなかった宣教師もいるが、当時が戦時だと分かった宣教師は、日本人が武器に対する理由を把握していた。これは時代的に必然的な結果であった。フロイスも日本人の武器と戦争について観察したのを残した<sup>43)</sup>。

ヴァリニャーノは、戦争の影響で日本人が残虐になったと指摘している<sup>44)</sup>。武士たちが簡単に人を殺すのを見て、この残虐性は長い戦争が原因だとしたのである。日本は近代に入ってアジアの国家を占領する過程で残虐行為を敢えて行った。作田啓一は、残虐行為に対する最悪感が希薄であることが日本人の特徴だとした。すなわち、戦争というのは元来そういうものだという「自然主義」が日本人の反省を阻害したという<sup>45)</sup>。作田の指摘の通りなら、日本人の残虐性は長期間の戦争と、日本人の気性のためと言うことになる。

ヴァリニャーノは日本人の二重性を指摘した。すなわち、日本人はすぐれた理解力と知能をもっているにも拘わらず、ヨーロッパ人とは反対の風習と悪習を持っているのが驚くべきだと言った。彼らが野

蛮人なら悪習（彼が指摘した悪習は人を簡単に殺すこと、色慾、飲酒、欺瞞）は驚くものではないが、教養を備えた国民が悪習に落ち込んでいるのは驚くべきだとしたのである<sup>46</sup>。彼は悪習の原因で仏教と戦争を挙げられた。巡察師という職責でヴァリニャーノの報告はローマの総長に直ちに繋がっていた。彼の判断は次に派遣される宣教師に影響を与えたのである。

## 結 論

日本はイエズス会の宣教師たちによって本格的に知られるようになった。宣教師は布教の目的で日本を訪問したので、かれらの記録は歪曲の可能性もあるが、彼らの報告によって日本はヨーロッパに紹介された。宣教師の報告はヨーロッパ人の日本認識において影響を与えた。

宣教師が認識した当時の日本人は、現代の日本人の特徴と言われるいくつかのことを持っていた。「ホンネとタテマエ」、「ウチとソト」の明確な区分、日本社会の閉鎖性、それにも拘わらず新しい文物に対する旺盛の好奇心、他人の視線を重要にする傾向、自然的な条件に基づいたメニューと住居環境、宗教的な特徴と厳しい位階秩序などが、宣教師によって日本人の特徴に看破されている。

しかし、小論で述べたように、この時期の特徴として「理性の基づいた合理性」を挙げたのは、現代の評価とは正反対であり、興味を呼び起こしている。また、合理性はオリエンタリズムでも東洋と西洋を分ける概念のなかで一つである<sup>47</sup>。すなわち、西洋の反対概念に導出されているのは、地理的なこと以外に、騙かされ易い、エネルギーや意欲に欠けている、陰謀的な行動、怠け、非合理、非論理、不明確、捻くれ、異常などがある。

こういう脈絡から見ると、当時の日本人は西洋人に高い評価を受けた。同時に既存の東洋が持っていた「未開」、「野蛮」という概念的な範疇からは外れている東洋だと言える。この時期、西洋人から合理的だという評価を受けていた日本人がどの時期から非合理的な国民に変貌していくのかについての考察は、今後、西洋人の日本人認識の研究において重要な焦点になると思う。

## 注

- 1) 松田毅一、「大航海時代と日本」、『探訪大航海時代の日本-[1]南蛮船の渡来』（小学館 1978）, pp.43-45.
- 2) マルコ・ポーロは1271年から1295年まで東方を旅行して記録を残したが、日本を「ジバング」に紹介しながら、黄金と真珠があふれる富を有している王国に描いた。마르코폴로, (ハンミヨン訳)『東方見聞録 (The Travels of Marco Polo)』（1991）, pp.287-293.
- 3) 量的には宣教師のものには及んでないが、ヨーロッパの町人の記録を通して当時の日本の事情が西洋に紹介されていた。宣教師の記録は布教の大変さや成果のために自分達に有利に加工された可能性もある。西洋人の日本認識の総合的な検討という所では町人の見解も察する必要はあるが、これは次の論文で検討することによる。
- 4) 辻村明, 古畑和孝, 鮎戸弘編集, 『世界は日本をどう見ているか』（日本評論社 1987）, pp. 94-96.
- 5) 18世紀以降を対象にしたサイド (Edward E. Said) のオリエンタリズムが、この時代まで遡ってできるかの問題はオリエンタリズムの起源を明かすという点で、今後筆者の主研究課題である。日本を対象にしてオリエンタリズムの起源を追跡するためには、西洋人の近世日本日本人に対する認識も含むべきだが、今度は本稿の研究範囲で簡単に言及する。
- 6) 松田毅一編, 「西洋人のみた日本と日本人-ザヴィエル、トルレス、ヴィレラの書簡より」『探訪大航海時代の日本-[1]南蛮船の渡来』（小学館、1978）, pp.151-152から再引用。原典は Georgius Schurhammer S.J, Josephus Wicki S.J, *Epistolae S.Francisci Xaverii aliaque eius scripta*. Monumenta Historica Societatis Jesu. Tomus II. 1549-1552. vol. 68. Roma 1945. pp. 186-189.
- 7) ザビエルが日本人にはじめて会ったのは、実際に渡日する前で、マラッカで侍の弥次郎という日本人に会って、日本人に対する良い印象を受けて、これをきっかけに日本での布教活動を決心したという。松田毅一著, 『西洋との出会い-南蛮太閤記』（上）（大阪書籍 1982）, pp. 65-66.
- 8) 松田毅一編, 前掲書, pp.156-158から再引用。原典は *Cartas qve os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus Primerio Tomo*. Evora. 1598. ff. 17v-18v.
- 9) 松田毅一, 前掲書, pp. 193-194.



- 10) 上掲書, pp. 190-192.
- 11) 土居健郎, 『表と裏』(弘文堂 1985), pp. 25-28.
- 12) 南博, 『日本人論—明治から今日まで』(岩波書店 1994), pp. 252—253
- 13) ザビエルが1552年1月29日付けのインドのコーチンでヨーロッパの同僚あての書簡、松田毅一編, 上の文章 p. 154から再引用。原典は Georgius Schurhammer S. J, Josephus Wicki S. J, *Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta*. Monumenta Historica Societatis Jesu. Tomus II. 1549~1552. vol. 68. Roma 1945. pp. 254-255, 277.
- 14) 마루야마 마사오, (김석근譯), 『일본의사상』(한길사1998), pp.209-212.
- 15) 芳賀紘, 『日本人らしさの構造』(大修館書店 2004), pp. 98-100.
- 16) 前掲書, pp. 24-25. 浜口恵俊は日本人の行動パターンは個別的状況によって柔軟に変化するもので、一定の形式を従う西洋のそれとは対比されるとしてきた。杉本良夫は個別的・非形式的なのは前近代社会集団の特徴で、日本はこういう性格をもっている。浜口恵俊著, 『日本らしさの再発見』(講談社 1988) 参考, 杉本良夫・ロス・マオア著『日本人論の方程式』(筑摩書房 1995) を参照。
- 17) ヴァリニャーノ, (松田毅一他譯)『日本巡察記』(平凡社 1973) の地図を参照。
- 18) ビレラの1565年9月15日付けの書簡に「国民みんなが白くてポルトガル人もその以上ではない」と記してある。松田毅一編 前掲書, pp. 158-159.
- 19) 上掲書, pp.151-152.
- 20) 上掲書, pp.158-159.
- 21) フロイスはうまれつきの文才と語学能力認められて巡察師と上長からザビエル以降の日本布教史の記録という特殊の任務を担当した。ここから出たのが『日本史』と『日本覺書』である。『日本覺書』には日本人の生活上の風俗をヨーロッパ文化と比較的に客観的に比較叙述している。
- 22) ルイス・フロイス, (岡田章雄譯注) 『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波文庫, 1991)。男性に関するのは第一章, pp. 19-38. 女性に関するのは第二章, pp. 39-48を参照。
- 23) ザビエルは山口の大内義隆に会うために行った時、見窄らしい外見で断われたことがある。松田毅一, 前掲書, p. 72.
- 24) 前掲書, pp. 23-24.
- 25) ヴァリニャーノ, 前掲書, p. 20.
- 26) ルイス・フロイス, 前掲書, p. 58.
- 27) 김태정, 「일본인의 음식문화와 풍토」, 『음식으로 본 동양문화』, (1999, 대한교과서), pp. 77-103.
- 28) 松田毅一著, 前掲書, pp. 207-208.
- 29) 松田毅一編, 前掲書, pp. 151-152.
- 30) 上掲書, pp.154-156.
- 31) ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太譯『日本史』1 (中央文庫 2000), pp. 32~33 日本の僧侶は外国人の宣教師たちに飲食をもてなしながら、彼らの宗教について聞いている。また、フロイスが織田信長に会って対話をする部分を見ると、彼は他の文物に対する好奇心で長い対話をしたと書いてある。『日本史』2, pp. 100-154.
- 32) 南博, 前掲書, pp. 229-230.
- 33) ヴァリニャーノ, (松田毅一他譯)『日本巡察記』 pp. 16-17.これに関する内容はフロイスも指摘していることで、特に、女性の僧侶の街の場合、私娼をなしていた。ルイス・フロイス著 (岡田章雄譯注) 前掲書, pp. 52-54.
- 34) 松田毅一編, 前掲書, pp. 151-152.
- 35) 박용구, 「凹型문화론을 통해 본 일본인의 종교의식」 『日本研究』(2006. 12), p. 18.
- 36) ルイス・フロイス著, 前掲書, p. 89
- 37) 「生きているうちには神様、死んでからは仏様」という宗教観は神道が持っている現世肯定的な側面と仏教が持っている来世肯定的な側面、すべてを受容しようとする日本人の特徴的な宗教観である。김태정, 「일본인의 종교와 종교의식」, 『종교로본동양문화』(역민사 2002), pp. 109-110.
- 38) 松田毅一編, 前掲書, pp.156~158
- 39) 戦国大名の国を支配するための法律, 『広辞苑』(CASIO 2006)
- 40) 박석순 외, 『일본사』(대한교과서 2005), pp. 171~178
- 41) 中根千枝, 『タテ社会の人間関係』(講談社 1967), pp. 70~74
- 42) 南博, 前掲書, pp. 243-244, 再引用
- 43) ルイス・フロイス, 前掲書, 第7章 参考
- 44) ヴァリニャーノ, 前掲書, pp. 15~19
- 45) 南博, 前掲書, pp.230-231, 再引用
- 46) ヴァリニャーノ, 前掲書, pp. 19~21
- 47) 西洋は東洋の定義を下す時、自分達の対極的な要素で、東洋に対する定義を下している。西洋が合理的、論理的、直接的、正常で、これの反対が東洋だと西洋は認識しているとサイドは指摘した。Edward W. Said, *Orientalism* (Vintage Books 1979), pp. 38~40

## 参考文献

- 김태정, 「일본인의 음식문화와 풍토 (日本人の飲食文化と風土)」, 『음식으로 본 동양문화 (飲食を通じてみた東洋文化)』, 대한교과서, 1999, 「일본인의 종교와 종교의식 日本人の宗教と宗教意識」, 『종교로 본 동양문화 (宗教を通じてみた東洋文化)』, 역민사, 2002
- 마르코폴로, 한미영 역, 『東方見聞録, The Travels of Marco Polo』, 일신서적출판사, 1991
- 박석순 외 공저, 『일본사 (日本史)』, 대한교과서, 2005
- 박용구, 「凹型문화론을 통해 본 일본인의 종교의식 (凹型文化論を通じてみた日本人の宗教意識)」, 『日本研究』, 2006년 12월호
- ヴェリニャーノ, 松田毅一他譯, 『日本巡察記』, 平凡社, 1973
- 中根千枝, 『タテ社会の人間関係』, 講談社, 1967
- 辻村明, 古畑和孝, 鮑戸弘 編集, 『世界は日本をどう見ているか』, 日本評論社, 1987
- 土居建郎, 『表と裏』, 弘文堂, 1985
- 西田ひろ子, 『異文化間コミュニケーション入門』, 創元社, 2000
- 芳賀紘, 『日本人らしさの構造』, 大修館書店, 2004
- 濱口恵俊, 『間 (あいだ) の文化と独 (ひとり) の文化』, 知泉書館, 2003
- 松田毅一, 「大航海時代と日本」, 『探訪大航海時代の日本-[1]南蛮船の渡來』, 小学館, 1978  
『西洋との出会い-南蛮太閤記』(上), 大阪書籍, 1982
- 南博, 『日本人論-明治から今日まで』, 岩波書店, 1994
- ルイス・フロイス, 岡田章雄譯注, 『ヨーロッパ文化と日本文化』, 岩波文庫, 1991  
松田毅一・川崎桃太譯 『日本史』1, 中央文庫, 2000  
松田毅一・川崎桃太譯 『日本史』2, 中央文庫, 2000
- Edward W. Said, *Orientalism*, 25th Anniversary Edition, Vintage Books, 1979